コミュニケーションの多角的分析

―言語、パラ言語、身体動作、及びそれらを統合する視点から―

（要旨）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号: D173692

氏　　名:LUDIN SARIT（ルディン・サリト）

本研究の目的は（1）～（3）の 3 つである。

（1）日本人のコミュニケーションを 3 つの要素（言語、パラ言語、身体動作）に分けて、各要素の特徴、及び誤解を招きやすい要因について説明する。(2) コミュニケーションの 3 つの要素を合わせて、聞き手の視点からコミュニケーションがどのように感じられるかを分析する。(3) 従来のコミュニケーションモデルに修正を加えて、言語、パラ言語、身体動作の三要素を網羅する新しいコミュニケーションモデルを提案する。

本研究の目的を達成するために、日本人が英語外来語、パラ言語及び身体動作を統合し、どのようにコミュニケーションを行うのかを分析する。日本語における様々な英語外来語の使用（コードスイッチング、混合語、和製英語など)、パラ言語（音声、音質など）と身体動作（表情、ジェスチャー、しぐさなど）を統合することで、会話者が聞き手の視点からコミュニケーションをどのように感じ取っているかを明らかにする。

本研究の参加者は、広島大学の 2 つのキャンパスに所属する（日常的に生活している）学生と教職員、卒業生である。研究参加者は 20 代前半（大学生、社会人）から 70 歳代までの日本人である。インタビュアーは日本語を話せる外国人（著者）である。インタビュー調査のデータ収集方法は録音、録画と筆記による。研究に参加してもらう前に、研究参加者に研究内容、データ収集と分析について詳しく説明し、参加に同意した研究参加者には「同意書」に署名してもらった。本研究には同意の得られた研究参加者のデータのみを使用している。これらデータについて 4 つの点から議論を進める。①日本語の会話において外来語語彙の使用の場面と使用法を分析する（外来語および和製英語)。②日本文化を反映した非言語的コミュニケーションの使用方法（沈黙、笑顔、表情、ジェスチャーなどの身体動作)。③現代日本人は総合的にどのようなコミュニケーション（外来語、パラ言語及び体の動きの組み合わせ）を取るか。④相手への配慮や同調を重んじる日本文化の影響がコミュニケーション方略にどのように反映されているか。

つぎに本論文の構成について説明する。

第 1 章では、研究背景、先行研究、課題と目的について述べる。従来の社会言語学において、日本語における英語外来語の使用、非言語コミュニケーションのパラ言語や体の動き、文化のコンテクスト中心の構造的アプローチなどを個別の社会言語として考え研究することが主流であった。しかし、それらの要素を全体として捉えたコミュニケーションに関する研究は少ない。そこで本研究は、その 3 つの重要な要素を 1 つのコミュニケーション方略として捉えて考察する。

第 2 章では、文化のコンテクストの背景、文化のコンテクストの特徴という側面から、日

本語における英語外来語の使用方法（異質性）、パラ言語、体の動きに関する分析結果を説明する。文化のコンテクストでは口頭コミュニケーションと非言語コミュニケーションの重要性について焦点を当てた。また、コンテクストの定義と用語の説明を行った。

第 3 章では、①英語外来語の背景、②「外来語」、と「和製英語」の定義用語、③データ収集方法と分析方法、④日本語での会話における英語外来語の特徴を述べる。実際の会話の録音で先行研究の論述を検証し、データ分析を国立国語研究所と NHK 放送文化研究所の行った調査結果と統計的に比較し、英語外来語の使用方法を明らかにする。

第 4 章では、非言語コミュニケーションの①パラ言語の背景、②動作学（キネシクス）の背景、③現代日本人の非言語コミュニケーションの特徴を述べる。録画のデータについてはテイラー（Taylor, 1974）のリストに基づき、高梨（2016）の分析方法を用いて、会話コミュニケーションの分析を行った。さらに、デズモンド（Desmond, 1995）や東山とフォード（2016）に基づき身体動作を比較して動作の意味を説明した。

第 5 章では、観察的視点から日本人の総合的なコミュニケーションスタイルを述べて、会話の聞き手に話し手の言いたいことが伝わるかについて述べる。

第 6 章では、結論として、第 3 章から第 5 章致すまで見られる話し手のコミュニケーション行動によって、「言語」中心であったコミュニケーションモデルに加えて、言語（英語外来語・日本語）、パラ言語、及び身体動作の包括的なコミュニケーションモデルを提案する。

第 7 章では、終章として、全体本研究をまとめる。さらに、今後の課題について述べる。

本研究では、日本のコミュニケーションにおける方略として、言語、パラ言語、身体動作に焦点を当てた。最終的に、分けられた要素を再び組み合わせて、総合的コミュニケーションの方法について説明し、新しいコミュニケーション方略を提案した。本研究の結果から、日本語における英語外来語の使用、パラ言語、身体動作で変化があった部分について論述した。まず、日本語の英語外来語ついては、英語外来語の種類は多いが、使用頻度が少ないこと、さらに英語外来語の使用頻度が少量だからこそ目立ち、キーワードになりやすく、記憶に残りやすいことを指摘した。本研究のデータを、NHK 放送文化研究所の 2015 年、2020 年の『現代日本人の意識構造』、国立国語研究所が 2017 年から 2019 年に行った「BCCWJ 語種構成表」と比較した。分析結果から、「書き方」と「話し方」は同じ現象を示すということが分かった。次に、パラ言語である。日本語のパラ言語には 8 つの特徴が見られた。その中で、「沈黙」、「短い間合い」（短いポーズ）に焦点を当てた。本研究のデータ分析の結果、日本における「沈黙」より「短い間合い」（短いポーズ）や「フィラー」の使用量が多いこ

とが分かった。さらに観察者の視点から日本の身体動作を説明した。本研究で挙げた事例から、身体動作は 3 つの意味を持つことが分かった。一つの意味はアイコニックジェスチャーである。アイコニックジェスチャーは、物事によって言葉で伝えにくい意味をより分かりやすい形で表すものである。もう一つは言葉を思い出すための支援ツールとしてのジェスチャーである。話している間にジェスチャーを使用することは、話し手が言葉を思い出して発話を再開するのを助ける。最後は付随する運動である。この身体動作は会話者の心理状態を表すものである。そして、3 つの要素（言語、パラ言語、身体動作）を合わせてコミュニケーションの分析を行った。その分析結果に基づいて、日本におけるコミュニケーションの 3 つの要素の関係性を述べた。そして、バーンランドの「相互交渉コミュニケーション」モデルを参考に、「対人コミュニケーションためによりスムーズなアプローチを決めるモデル」と「『L』、『P』、『K』を用いるデコード・エンコードプロセスのモデル」を作成した。この 2 つの図式で表したように、理想的な状態に到達するために、各会話者は自分のコミュニケーションの位置づけを意識することが必要である。従って、各会話者は言語、パラ言語と身体動作を用いて適切なコミュニケーション方略を形成する。ただし、コミュニケーション方略を形成するために、各会話者はコミュニケーションの 3 つの要素（言語、パラ言語、身体動作）を用いるだけではなく、どのようにその 3 つの要素を組み合わせるかが重要である。そうすれば、コミュニケーションのバランス（話し手の位置）を保ちながら、ミスコミュニケーションを抑えることができると考えられる。